

## 学生と保育者が育ち合う保育所実習

### — 4年制保育士養成移行期の新たな取り組みを中心に —

高月教恵<sup>(1)</sup>・岡崎眞智子<sup>(2)</sup>・佐藤有子<sup>(3)</sup>・竹縄ひとみ<sup>(3)</sup>・甲斐佳子<sup>(4)</sup>・伊達ますみ<sup>(5)</sup>

本稿は、大学での保育所実習の新たな取り組みとその成果についての実践報告である。

福山市立大学は、福山市立女子短期大学の保育士養成37年間の実績を継承して、2011年に開学した公立大学である。大学への移行期に、保育所実習において、新たな取り組み（実習先限定、教育支援センター設置、特任教員任用、実地体験活動）を実施した。その結果、学生の実践的な学びは深まり、実習先からは「実習生を育てることは、福山市の保育の質をあげること」と言われるまでになった。

キーワード：実習先限定、教育支援センター、特任教員、実地体験活動

はじめに

全国保育士養成協議会専門委員会は研究成果『保育実習指導のミニマムスタンダード』<sup>1)</sup>を報告し、保育実習のあり方を示し、「保育実習における協働」を課題と明記して10年余りが経過した。各養成校では、各々の状況において、保育実習の充実に向けて動き出し、さらに協働について実践して、報告している。たとえば、増田まゆみらは、保育現場と養成校との協働による保育所実習のあり方について、「保育所実習指導ガイドライン作成・試行・検討」<sup>2) 3) 4) 5)</sup>を調査・研究し、ガイドライン作成の必要性を報告している。さらに「保護者支援」<sup>6) 7) 8)</sup>について研究し、「実習指導者の専門性」<sup>9)</sup>に焦点をあわせて研究を進めている。澤津まり子らは、実習園の意識調査を実施して「実習園と養成校の協働の方向性として双方の役割分担を明確にし、その実現に努めるとともに情報交換して共通認識することが求められている」<sup>10)</sup>と述べ、実習日誌に焦点をあわせての協働について研究をしている。堀田正央らは実習評価の視点から保育実習システムについて考察し、実習依頼、事前指導の段階から保育実習の目標・方法・内容について大学・実習生・実習園が理解を共有すると共に、よりインタラクティブ

な連携をとっていく必要性を指摘している<sup>11)</sup>。これらのことから、養成校の学生の実践力を育てるために、保育現場と養成校の協働のあり方について研究が進められている様子がうかがわれるが、増田、澤津、堀田らの研究は現状の保育実習の内容・方法の見直しに焦点をあわせての研究であり、実習体制の見直しまでには至っていない。そこで、本稿では、2年制から4年制への大学（養成校）の移行期だからこそできる新たな取り組み（実習先限定、教育支援センター設置、特任教員任用、実地体験活動）に焦点をあわせて、保育現場と養成校の協働について考察する。

2011年4月、福山市立大学（以下、大学）は4年制の公立大学として開学した。前身の2年制短期大学である福山市立女子短期大学（以下、短大）は、2012年3月に閉学した。大学教育学部保育コースは、短大保育科の保育士養成37年間の実績を継承して、高い専門性と実践的指導力を有し、子育て支援のできる学生を地域で育成することを目的としている。

高月は短大の実習に関しては、保育実習Ⅰ（保育所実習）、保育実習Ⅱ、保育実習事前事後指導、幼稚園教育実習、幼稚園教育実習事前事後指導を担当した。大学では、保育実習Ⅰ（保育所実習）、保育実習Ⅱ、

(1) 福山市立大学名誉教授

(2) 元福山市立大学教育支援センター

(3) 福山市立大学教育支援センター

(4) 福山市児童部保育課

(5) 福山市教育委員会

保育実習事前事後指導Ⅰ・Ⅱ、幼稚園教育実習Ⅰ・Ⅱの幼稚園教育実習Ⅰ、幼稚園教育実習事前事後指導を担当した。大学、短大ともに高月が担当したのは、保育実習Ⅰ（保育所）・Ⅱ、保育実習事前事後指導と幼稚園教育実習Ⅰと幼稚園実習事前事後指導である。そこで本稿では、高月が短大・大学ともに全期間の実習を担当した保育所実習に焦点をあわせる。岡崎（元教育支援センター）、佐藤（元保育課→教育支援センター）、竹縄（元附属幼稚園→教育支援センター）、甲斐（保育課）、伊達（教育委員会）は、高月とともに大学での新たな試みに各々の立場で取り組み、実践した主メンバーである。

## 1. 保育所実習における短大からの方法の継承

### 1) 保育所実習の時期

表1 短大保育科本学保育コース実習スケジュール（2011年度）

	1年	2年
実習の種類と時期	保育実習Ⅰ（施設） （2月～3月 10日間）	幼稚園教育実習（附幼） （6月 1週間） 保育実習Ⅰ（保育所） （6月～7月 10日間） 保育実習Ⅱ・保育実習Ⅲ （7月 10日間） 幼稚園教育実習（学外） （9月 2週間） 幼稚園教育実習（附幼） （10月 1週間）

※各実習は90時間2単位である。

1日9時間実習で10日間としている。

表2 大学保育コース実習スケジュール（2013年度）

	1年	2年	3年	4年
実習の種類と時期		幼稚園教育実習Ⅰ （6月 1週間） 保育実習Ⅰ（保育所） （6月～7月 10日間） 保育実習Ⅱ （7月 10日間） 実地体験活動	実地体験活動  幼稚園教育実習ⅡA （9月 3週間） 保育実習Ⅰ（施設） （10月 10日間） 保育実習Ⅲ （10月～11月 10日間）	実地体験活動

※各実習は90時間2単位である。1日9時間実習で10日間としている。

短大、大学での実習の時期は、表1、表2のとおりである。大学での保育士登録資格取得学生数50名は短大と同じである。学生は、保育実習Ⅰ（保育所）（必修）を修了後、ほぼ全員の学生が保育実習Ⅱ（選択）も受講している。保育所実習の時期は、大学でも2年次に実施し、時期はほぼ短大と同じである。

しかし、短大から大学への移行期に、保育士養成課程改正（2011）があり、保育実習Ⅰ（保育所）・保育実習Ⅱと保育実習Ⅰ（施設）・保育実習Ⅲを連続して行わないことになった。大学においては、1年生の10月に保育所の1日見学実習（保育実習Ⅰ（保育所）事前指導として5コマ）をして、2年生の6月から8月初旬に保育実習Ⅰ・Ⅱを実施している。保育実習Ⅰ（保育所）事前事後指導、保育実習Ⅰ（保育所）、保育実習Ⅱ事前事後指導、保育実習Ⅱの実施の流れは次のとおりである。保育実習Ⅰ（保育所）事前指導（3日間で7コマ）→休日（1日）→保育実習Ⅰ（保育所）（10日）→保育実習Ⅰ（保育所）事後指導（1日3コマ）→休日（2日）→保育実習Ⅱ事前指導（1日4コマ）→休日（2日）→保育実習Ⅱ事前指導（1日4コマ）→休日（4日）→保育実習Ⅱ（10日）→保育実習Ⅱ事後指導（4日間で8コマ）。以上に、大学の各保育実習事前事後指導は、15コマずつの授業を確保している。

4年制大学になったにもかかわらず何故2年次から実習を始めるかということ、乳幼児教育には教科書というものはなく、目の前にいる子供の姿から子供の興味・関心を見取って、発達を見通して、保育者は子供とともに乳幼児教育を創っていくからである。そのことを示してくれたのが、IFEL（Institute For Education Leadership）<sup>12)</sup>であった。IFELでは、幼児教育の基本

は子供の観察から始まるということが打ち出され、4年制の教員養成構想が示された。IFELの4年制の教員養成大学構想は、実習と良い市民としての教養と文学・美術・音楽・体育など（共通教育科目）とワークショップ（専門教育科目）が4年間並行して行われている。まさに「なすことに

よって学び、学ぶことによってなす」ことを理想にしていた。実習開始時期を2年次からしたのは、大学においてこのことを実現したいという思いからである。さらに、現在の少子化によって、学生が乳幼児に触れる機会が少ない。そこで早い時期から乳幼児に触れながら、乳幼児の教育・保育理論を学ばせたいというねらいがあった。

## 2) 保育所実習前の附属幼稚園での観察実習

高月が短大に着任当時(2007年)、幼稚園教育実習は、附属幼稚園(2年6月・10月、各1週間)と学外幼稚園(2年9月、2週間)で実施された。

附属幼稚園での幼稚園教育実習(前期・後期、各1週間)は、学生を3グループに分けての五月雨式の実習であった。五月雨式の実習は、1週間ごとに3グループが順に入れ代って実習するため、幼稚園の現場は混乱し、短大の実習中の3週間の授業は、実習中の1グループの学生がいない状態で行われるため、すべての講座は17コマ開講されていて非能率的であった。そこで、それを改善するために、保育実習Ⅰ(保育所)に入る前に、学生全員の附属幼稚園での1週間の観察実習を実施することにした。つまり前期(6月1週間)の附属幼稚園での実習を学生全員(50名)の観察実習を主とする実習形態に切り替えたのである。さらに、後期(10月1週間)の附属幼稚園での実習を、主題にそって学生たちと子供たちで作る協同的学び(プロジェクト法)を中心とした。ただし、学生全員参加の実習であるので、園児の活動の邪魔にならないように、専任担当教員は学生と共に参加した。後期の附属幼稚園での実習の協同的学びは、短大と附属幼稚園の教員の学生指導の力量に懸かるところが大きかったが、前期の1週間の学生全員の附属幼稚園での観察実習は、その後に続く各種実習において非常に効果をあげた。観察実習中の昼食時は、当番の学生グループは子供といっしょに食事し、当番以外の学生は短大の教室で短大の教員(高月)といっしょに食事をした。その結果、短大で食事をする学生から教員に多くの質問が出されるようになった。質問内容は、主に子供の見方(理解)、実習日誌の書き方についてであった。このことによって、学生の実習に対する不安感が軽減され、実習日誌の書き方や子供理解などに大きな効果をあげた。そして短大の教員が実習に参加することに

よって、附属幼稚園(実習先)の教員と互いに密接な連絡を取り合って実習を実施できるため、学生対応が即座的にできる利点があった。学生同士も仲間とともに問題解決の糸口を積極的に探ることができ、学生同士で育ち合おうとする意欲が生まれた。そのことによって、さらに指導計画案や実習日誌作成に効果をあげるとともに、教材研究にも成果が表れ、学生同士の人間関係力も育った。この学生全員の附属幼稚園での観察を主にした実習(1週間)は、次に続く保育所実習や学外幼稚園実習の導入的役割も果たした。

そこで、大学でも引き続き、この附属幼稚園での1週間の学生全員の観察実習を実施することにした。その結果、この方法は、大学においても、短大の頃と同様、大きな効果をあげた。高月は、大学において、2012年度から2014年度まで幼稚園教育実習Ⅰ(附属幼稚園1週間)及び保育所実習を担当したが、大学完成年度の2015年度からは保育所実習のみを担当し、幼稚園教育実習Ⅱを担当している教員が幼稚園教育実習Ⅰも担当するようになった。しかし、この方法が定着したことによって、幼稚園教育実習Ⅰは、変わらず大きな役割を果たしている。

## 2. 保育所実習における大学での新たな取り組みと結果

### 1) 実習先を福山市内の公立保育所に限定

福山市には、2016年4月現在<sup>13)</sup>、就学前施設が161ある。保育所(園)は公立が54所、法人が51園、認定こども園10園、地域型保育事業所が11所、公私立幼稚園が37園である。

短大では実習先を福山市公私立保育所(園)及び近隣の岡山県・広島県内の山陽線沿いの出身園としていたが、大学では実習先を福山市内の公立保育所に限定した。大学から保育課に、実習日程・実習生数を知らせて実習依頼をする。保育課では、保育指導担当課長を中心に保育専門員(各地区指導担当)と実習先とが相談し、実習先を選択して、各実習先の受け入れ人数を決定する。それを受けて、大学では学生に希望調査を行い、学生の実習先の割り振りをしている(表3参照)。

大学においては、保育所実習専任教員1名の他に現場経験豊かな元保育所長を特任教員(20h～30h/週)として1名任用した。さらに、保育所巡回指導は、

表3 2016年度保育所実習先割振と実習後の実習連絡会報告内容

保育所名	実習生数	報告内容
A	2	実習生の態度、評価のし方、保育士の学び
B	2	研究保育、子どもの状況、実習生の態度
C	2	評価のし方、実習生の態度
D	2	実習生の態度、研究保育、
E	3	研究保育、実習生の態度
F	2	研究保育、保育士の学び、実習（保育）内容
G	2	研究保育、実習生の態度
H	2	実習生の態度、研究保育
I	2	実習（保育）内容、実習生の態度
J	2	研究保育、実習（保育）内容、保育士の学び
K	2	実習生の態度、研究保育、保育士の学び
L	2	実習（保育）内容、研究保育、保育士の実習生への指導のあり方
M	2	実習（保育）内容、保育士の学び
N	3	研究保育、実習生の態度
O	2	保育の方法、保育士の学び、
P	2	実習生の態度、職員の状況
Q	2	研究保育、実習（保育）内容・方法
R	3	実習生の態度、研究保育、
S	2	実習生の態度、保育士の学び、実習計画
T	2	実習生の態度、研究保育
U	2	実習計画、研究保育
V	2	実習日誌、保育士の学び、
W	3	保育士の学び、実習生の態度
X	2	実習生の態度、研究保育
Y	2	実習生の態度、保育士の学び

表4 保育所実習指導体制

機関	担当者
大学	【実習担当専任教員⇔特任教員】⇔教育学部全教員
実習先（保育所）	市保育課【保育指導担当課長⇔保育専門員（地区指導担当）】⇔実習先【保育所長⇔実習先保育士】

教育学部全員の教員があたることとした。但し、小学校教育実習等の他の実習巡回と重なる教員については配慮し、教育学部教育・保育実習運営委員会<sup>14)</sup>で全教員<sup>15)</sup>の巡回指導時間数の調整をしている。

このように実習先を福山市公立保育所に限定したことによって、実習先においては、市保育指導担当課長を中心に保育専門員（市保育課各地区指導担当）、実習先保育所長、実習先保育士の連携体制がつけられた。

その結果、実習体制（表4参照）が充実したものとなり、実習中の気象警報が発令された場合の緊急連絡をはじめ大学と実習先との諸連絡が非常にスムーズになった。実習中の学生対応（指導を含む）等の困難な問題についても、大学（実習担当専任教員・特任教員）と実習先担当者全員（保育指導担当課長、実習先地区担当保育専門員・実習先所長・実習担当保育士）での話し合いが容易になり、組織的に学生指導ができるようになった。また、教育学部の全教員が巡回指導を担当することによって、実習先からは、「いろいろな専門の教員の話に触れることができ、非常に新鮮で、新しい知見を得ることができた。巡回指導での大学教員との話し合いが楽しみになった」と好評である。

## 2) 教育支援センター<sup>16)</sup>の設置および特任教員の配置

大学に教育支援センターを設置し、現場経験豊富な保育所長・幼稚園長・小学校長・特別支援学校長の経験者を特任教員として任用し、専任教員と協力して実習・実習事前事後指導・実地体験活動・教職実践演習の指導にあたっている。

その結果、特任教員が現場（保育課及び実習先保育所）と大学の太いパイプ役となり、実習先と大学の連携が密になりスムーズになった。そして、一人一人の学生の実習状況の把握、実習中の一人一人の学生の諸

問題への対応がきめ細やかにできるようになり、実習先と大学が連携しての実習生（学生）の指導を行うことにつながっている。

大学における教育学部保育コースの学生の教育支援センターの利用状況（延人数）は、2014年度は1578名、2015年度は1752名、2016年度は2162名（卒業生7名含む）と非常に高い。大学において、学生は、専任教員だけではなく、教育支援センターを訪れて特任教員に相談できることによって、不安（実習前・中・後）が軽減し、問題解決の糸口を見つけている。また、実習及び実習事前事後指導だけではなく、大学における学生の個別指導が充実した。

### 3) 実習連絡会の開催

学生の実習先への事前訪問前と実習終了後に、大学で保育所実習連絡会を開催し、協議の場を設けている。参加者は、市から、保育指導担当課長・保育専門員・全実習先所長である。大学からは、学部長・各実習専任教員（保・幼・施設）・各特任教員（保・幼担当）・事務局職員である。

実習前の連絡会では、大学から、『保育実習（保育所）の手引き』を配布し、手引きに従って学生の様子、学生の学びの状況を具体的に説明し、実習内容、指導案の書き方などについて意見交換し、実習先からの質問に応じている。さらに実習時間や警報時対応等の連絡事項を徹底している。

実習前実習連絡会後、各実習先は自主的に所内研修を開いて、『実習の手引き』に従って職員間で共通理解を図るようになった。そこでは、学生（実習生）の実習に臨む態度・学生（実習生）の実習日誌・指導計画案の立て方について理解を深め、大学の様式にあわせて実習先の指導計画案の様式を検討する実習先が増えた。そして、各実習先では、自主的に学生（実習生）の実習計画を立て、学生（実習生）を迎える体制を整えてくれるようになった。実習先から提示される実習計画は、各実習先の行事等の状況にあわせて作成されるので一様ではない。しかし、保育実習Ⅰ（保育所）ではすべての年齢の見学・参加実習を主とし、保育実習Ⅱでは配属クラスを決め、研究保育にむけて、保育の流れを学生が理解して研究保育をすることができるようという配慮がうかがわれる。短大では実習連絡会を実施したことがなかったため、実習の方法に

ついては、実習先に任せていたところがあり、すべての年齢の見学・参加実習をしていたとは限らない。また、研究保育についても必ずしも実施されたわけではなかった。これらのことから、実習連絡会を通して、学生の実習内容が充実して深まったことを実感している。本学では保育所実習指導ガイドラインを特別に作成していない。しかし、実習担当教員が作成した『保育実習（保育所）の手引き』<sup>17)</sup>が大学と実習先との共通認識の役割を果たしているものと考えられる。

実習後の連絡会では、各実習先からの報告と意見交換を主としている。2012年度から現在（2016年度）まで5回の実習後の連絡会を開催した。実習前の連絡会をあわせると10回の連絡会を開催したことになる。実習後の連絡会では、実習先すべての保育所の代表者（主に所長）から自由に感想を述べてもらっている。回を重ねる度に各実習先では、連絡会参加前に所内で話し合いがもたれ、それをまとめた的確に端的に報告されるようになった。報告（感想）の内容は、表3のとおりである。実習生の態度（68%）についての報告が一番多く、内容としては挨拶、マナー、言葉遣い、実習への積極性などについて、賛否両論ではあるが、感想が述べられた。次に研究保育（56%）の内容、展開方法、反省会の様子についてなどが多い。実習生を受け入れたことによって、保育士の学び（40%）につながったという感想も述べられた。各実習先からの報告（感想）の後の意見交換も活発で、まさに実習先と大学が協働して実習指導をしていると実感している。

これらのことから、実習連絡会を開催することによって、大学では学生の実習についての課題が明確になり実習指導および実習の改善につながった。実習先では所内研修の充実、保育内容・指導計画の見直し、各保育士としての自覚の再認識につながった。しかし、「実習評価が難しい」との実習先からの意見には、大学実習担当者から指標を説明しているが十分な対応ができているとは言えない。その点は、今後の課題である。

### 4) 実地体験活動

実地体験活動とは、保育所実習を修了した学生が、福山市と大学が協定を締結した福山市立保育所等（主に実習先）において、継続的にボランティアとして、



補助的に関わる体験活動のことである。体験活動の内容は、保育活動補助、保育所行事にむけての準備及び当日参加、保育教材作成補助、延長保育補助、子育て支援活動参加等である。活動内容の詳細は、保育所長と特任教員及び学生が話し合っている調整をしている。申込窓口は教育支援センター、指導は主に特任教員が当たっている。実地体験活動は学生の自主性によるものであるが、各学年50名中、2014年度は2年生15名・3年生29名・4年生20名、2015年度は2年生9名・3年生35名・4年生33名、2016年度は2年生10名・3年生35名・4年生19名、が参加している。教育支援センターには教育学部全学生のファイルを保管していて、実地体験活動後、学生はポートフォリオに記録を書き、教育支援センターの自分のファイルに綴じる。このポートフォリオは4年次の教職実践演習に利用され、実践の省察に役立っている。就職試験においても、学生はこのポートフォリオを見直すことによって職務の意義や職場での今後の方向性が明らかになり、面接試験や小論文に大いに役立ったと言う。

保育所では、実習生が実地体験活動に来ることを子どもたちは楽しみに待っていて、保育士もとても助かっているとのことである。

これらのことから、学生の実践的指導力は高まり、保育所では保育活動が活性化している様子がうかがわれる。

## おわりに

実習先限定による実習体制の充実、教育支援センターの設置および特任教員の配置、実習連絡会の開催、実地体験活動によって、保育現場と養成校との協働による保育所実習になりつつある。しかし、今後の課題として次のことがあげられる。

- ・本学は4学期制である。そのため実習のある学期中は実習のみに集中することができる利点があるが、実習事前事後指導もその学期中に行うため、事前事後指導が短期集中型になってしまっている。
- ・教育学部全教員による巡回指導を実施しているが、巡回後は各教員の報告書を実習担当者が実習事後指導に生かすのみに留まっている。教員相互の共通認識や意見交換の場が必要である。
- ・4年間の大学生活において、学生の実践と理論の学びをどのように深めるかを研究する。

- ・実地体験活動の単位化について検討する。

大学が開学して今年度で7年目を迎えている。高月らは、大学において新たな取り組みを実践し、保育現場と養成校との協働による保育所実習に取り組んできた。そして、学生の実践力は育ち、保育現場の保育の質は向上したと実感している。しかし、社会の状況が変化し、実習担当者が変わり、学生が変わる中で、実習体制がこのまま持続するとは限らない。しかし、学生が真摯に「保育」に向かい合うのは、やはり「実習の場」である。学生にとって実りある実習になるよう、そして保育現場にとっても保育の質の向上につながる実習であるように、実習担当者は、実習体制・実習方法・実習内容の視点から、「保育現場と養成校との協働による保育所実習あり方について」、研究を深めなければならない。

## 注

- 1) 全国保育士養成協議会『保育実習指導のミニマムスタンダード』北大路書房、2007
- 2) 増田まゆみ、柴崎正行他「保育現場と養成校との協働による保育所実習のあり方Ⅰ～保育所実習指導における課題と実習指導ガイドライン作成の意義～」日本保育学会第64回大会発表要旨集、2011、p.378
- 3) 小櫃智子、増田まゆみ他「保育現場と養成校との協働による保育所実習のあり方Ⅱ～「保育所実習指導ガイドライン」の試案作成とその活用～」同上、p.378
- 4) 爾寛明、石井明仁他「保育現場と養成校との協働による保育所実習のあり方Ⅲ～保育士及び園長等へのアンケート調査～」、日本保育学会第65回大会発表要旨集、2012、p.584
- 5) 小櫃智子、増田まゆみ他「保育現場と養成校との協働による保育所実習のあり方Ⅳ～保育所実習指導ガイドラインの試行とその検討～」同上、p.585
- 6) 石井章仁、倉掛秀人他「保育現場と養成校との協働による保育所実習のあり方Ⅴ～保護者支援に関する学生の学びの実態～」、日本保育学会第66回大会発表要旨、2013、p.220
- 7) 増田まゆみ、小櫃智子他「保育現場と養成校との協働による保育所実習のあり方Ⅵ～保護者支援に関する学生の学びを可能にする実習モデル～」同上、p.221
- 8) 小櫃智子、増田まゆみ他「保育現場と養成校との協働に

- よる保育所実習のあり方Ⅶ～保護者支援に関する学生の学びに関する学生アンケート調査」、日本保育学会第67回大会発表要旨、2014、p. 226
- 9) 増田まゆみ、小櫃智子他「保育現場と養成校との協働による保育所実習のあり方Ⅷ～実習指導者に求められる専門性の検討～」日本保育学会第68回大会発表要旨集、2015
- 10) 澤津まり子、鎌田雅史「実習施設と保育士養成校の協働による保育実習（保育所）の実践－保育日誌の検討を手がかりとして－」、就実教育実践研究 第7巻2014、pp. 285-296
- 11) 堀田正央・松崎洋子「保育実習Ⅰ（保育所）と保育実習Ⅱにおける実習園評価および自己評価の評価観点の差異に関する研究」埼玉学園大学紀要（人間学部篇）第11号、2011、pp. 131-144
- 12) IEFLとは、1948（昭和23）年9月から1952（昭和27）年3月まで、8期にわたって、文部省とCIE（GH民間情報教育部、Civil Information and Education Section）の共催で、全国から教育関係の専門家を集めて開催された教育指導者講習会のことである。第1回から第4回迄が主として教育新制度に対する行政組織の整備を目的としたのに対し、第5回及び第6回は教育の内容の充実を目標として主として教職員の養成と再教育に対する措置が講ぜられた（教育指導者講習会、1950、序文）。第5回・第6回では、幼稚園教育グループ（第6回から幼児教育グループと改められた）が設けられ、第5回は1950年9月18日から12月8日まで、第6回は1951年1月8日から3月31日までの2回にわたってお茶の水女子大学で開催された。高月教恵「資料IFELの実際－大橋和子によるルイスの講義ノートを中心に－」福山市立大学開学記念論集『児童教育学を創る』児島書店、2011、pp. 135-163
- 13) 高月が福山市立大学に在職したのは、開学当初（2011（平成23）年度）から2016（平成28）年度までである。そこで、高月が保育所実習担当最終年度の2016年度の就学前施設数を記した。
- 14) 実習委員会は、実習連絡協議会（大学・実習受入先・関係機関）、教育学部保育・教育実習運営委員会（学部長・各種実習担当教員・学務課）、各種実習小委員会で組織的に連携を図っている。
- 15) 本学教育学部の全教員は28名である。教育学部の学生は教育コース（小学校教諭一種免許状に加えて幼稚園教諭一種免許状または特別支援学校一種免許状取得可能）50名・保育コース（保育士資格及び幼稚園教諭一種免許状の取得

可能）50名に所属し、教員は教育・保育系、心理系、障害・福祉系、内容系に所属している。

- 16) 教育支援センターの役割は、学生が豊かな学生生活を送ることができるように支援・指導することである。具体的には、1. 教育・保育実習に関する指導及び支援、2. 教育実践に関する指導および支援、3. 学校教育・家庭教育・子育て等に係る相談及び暮らしの健康教育、である。スタッフは、現場経験豊かな元保育所長、元幼稚園長・副園長、元小学校長、元特別支援学校長、である。
- 17) 『保育実習（保育所）の手引き』の内容は、まず教育学部の全体の実習の概要、留意事項、実習担当教員について記し、続いて保育所実習について記している。保育所実習についての内容は次のとおりである。（1）保育所実習の意義、（2）保育士資格取得のための厚生労働省の基準、（3）保育所実習の時期と実習施設、（4）保育所実習全体のプロセス、（5）保育実習Ⅰ（保育所）・保育実習Ⅱに関わる履修条件、（6）実習準備と心構え、（7）事前訪問（保育所におけるオリエンテーション）、（8）保育所実習の流れ、（9）実習中における実習日誌の記入、（10）保育所実習事後指導、（11）保育実習（保育所）に関わる評価、（12）その他連絡事項。資料として各様式（実習申込書、実習学生票、出席簿、欠席・遅刻・早退届、本学実習評価表）を添えている。

（2017年10月23日受稿，2017年11月24日受理）

## The Nursery Practical Training in which Students and Nursery School Teachers can Improve Together: Our New Endeavor during the Transitional Period to Four Year Training of Nursery School Teachers

TAKATSUKI Norie<sup>(1)</sup>, OKAZAKI Machiko<sup>(2)</sup>, SATO Yuko<sup>(3)</sup>, TAKENAWA Hitomi<sup>(3)</sup>,  
KAI Keiko<sup>(4)</sup>, and DATE Masumi<sup>(5)</sup>

This practical report shows the new endeavors and the progress of our nursery practical training program at Fukuyama City University, which is a municipal university established in 2011. Our student training program has taken over the achievement of 37 year practices at Fukuyama City Junior College for Women.

During the transitional period from junior college to university, we practiced the new endeavors such as qualifying nursery schools for training, establishment of the Educational Practice and Student Support Center, employment of specially appointed teachers and making chances of actual experiences.

As a result, the students were able to deepen their practical knowledge, so their teachers at the nursery schools mentioned that training the students leads to improve the quality of nursery schools in Fukuyama city.

Keywords : qualifying nursery schools for training, Educational Practice and Student Support Center, specially appointed teachers, chances of actual experiences

---

<sup>(1)</sup>Professor Emeritus, Fukuyama City University

<sup>(2)</sup>Former Educational Practice and Student Support Center, Fukuyama City University

<sup>(3)</sup>Educational Practice and Student Support Center, Fukuyama City University

<sup>(4)</sup>Child Care Division, Children's Department, Fukuyama City

<sup>(5)</sup>Board of Education, Fukuyama City